

イスラエル アンベールド Vol. 「山上の垂訓(祝福の山)」



英語版オリジナル--2017年1月13日公開：

Israel Unveiled Vol. 1: Mt. of Beatitudes

https://youtu.be/v_-65iW76ys

メッセージ by Amir Tsarfati

Behold Israel : <http://beholdisrael.org>

私は今、祝福の山に立っています。ここは、間違いなく、人類の歴史の中で最も多く教えられ、また、分析されてきた説教の場所であろうと思われます。聖書には、「この群衆を見て、イエスは山に登り、おすわりになると、…口を開き、彼らに教えて、言われた（マタイの福音書5：1-2）」と書かれています。その時の教えは、後に何千回も説教の題材として取り上げられ、これまでに非常に多くの牧師や教師がそれについて教えてきました。

けれども、私からすると、山上の垂訓というのは、イエスのメッセージの中でも、最も誤解されているものの一つなのです。その理由は、それが文脈を無視して解釈されるからです。その土地柄や、民族、イエスのその他のみことばや教えを無視してしまうからです。

さあ、イエスの時代の、ユダヤ側のガリラヤ湖畔に身をおいてみましょう。

周知のとおり、私の背後にあるこのガリラヤ湖は、イエスの時代には、ユダヤ人が全体にわたって住んでいたわけではありませんでした。少なくとも、この湖の3分の2には、異教徒である異邦人が住んでいました。ユダヤ人は、ガリラヤ湖の北西部の湖岸しか支配していませんでした。あちらの溪谷からずっと、祝福の山を超えて、向こうのマグダラ、ゲネサレ、タブハ、カペナウム、ベツサイダ、コラジンです。ですから、今、私が立っているのは、ユダヤ人が主に居住していた地域です。イエスは、この場所の聴衆のほとんどがユダヤ人で、彼らが旧約聖書に書かれていることや伝統に精通していたことをふまえ、彼らの生涯でおそらく最も重要な教えを与えようとしていました。

山上の垂訓を理解するためには、数節さかのぼって、マタイの福音書4章を見なければなりません。

「イエスはガリラヤ全土を巡って、会堂で教え、御国の福音を宣べ伝え、民の中のあらゆる病気、あらゆるわずらいを直された。イエスのうわさはシリア全体に広まった。それで、人々は、さまざまの病気と痛みに苦しむ病人、悪霊につかれた人、てんかん持ちや、中風の者などをみな、みもとに連れて来た。イエスは彼らをお直しになった。（マタイの福音書4：23-24）」

イエスはそれらの人々を皆、癒されました。イエスが癒しを拒んだ事例は一つもありません。皆を癒されたのです。

「こうしてガリラヤ、デカポリス、エルサレム、ユダヤおよびヨルダンの向こう岸から大ぜいの群衆がイエスにつき従った。（マタイの福音書4：25）」

イエスのメッセージは、特定の人々や、特定の国、あるいは特定の地方に限られたものではなく、普遍的なメッセージでした。それは全世界に向けられたメッセージでした。「耳のある者は御霊が言われることを聞きなさい。」ところが、人々はその普遍のメッセージを取り上げて、イエスとは全く切り離されたものに仕立て上げようとするのです。それについては少し後でお話しします。

続いて、マタイの福音書5章はこう始まります。

「この群衆を見て、イエスは山に登り、おすわりになると、弟子たちがみもとに来た。そこで、イエスは口を開き、彼らに教えて、言われた。(マタイの福音書5:1-2)」

まず、イエスが群衆に囲まれていたことについてお話しします。聖書には、イエスはその群衆を見て、山に登ったと書かれています。よく、イエスが下の方において、皆がその回りを囲んで上方に座っていたと思われがちですが、違います。実際には、イエスは、私が今立っているこの丘の上に登り、人々は下の方にとどまっていた。今日、私たちの眼下にあるあの何千本ものバナナの木は、2000年前にそこにいた人々に容易に置き換えてみることができます。多くの人々が様々な場所から来ていましたが、ここはガリラヤ湖のユダヤ人区域ということで、その大部分はユダヤ人でした。

さて、世界中からたくさんの大学がここを訪れて、この地域の地理学的、地質学的な調査を行いました。彼らは、一人の人が、ある一つの山の頂に立つことで、どうやって何の問題もなく何千人もの人々にその声を聞かせることができたのかを知ろうとしていました。そして、ガリラヤ湖の周囲全体で、そのような事象を可能にする、優れて完璧な音響環境の整った場所が一つだけありました。それがまさに、今私が立っているこの場所なのです。あの窪地には、ここ50年くらいの間に何千本もの木が植えられました。

あの下の谷に人々が立っていると、誰でもここに登って来て、岩の上に座り、聖書を開いて教えることができました。すると、全員が、その人の発する一つ一つの言葉をほぼすべて聞くことができるのです。それができるのはこの場所だけです。これはかなり意義のあることです。

そのために、過去1600年間、ここが、山上の垂訓が行われた場所であるとされてきたのです。

これで、1920年代後半に、ベニート・ムッソリーニが、今日祝福の山の山頂に建っている、このカトリック教会の建設を支援したことの説明がつくかもしれません。山上の垂訓教会は、建築家であった有名なカトリック僧、アントニオ・バルルッツィ (Antonio Barluzzi) によって建てられました。バルルッツィは、イエスの教えの全てを、一つの建物の中に集約しようとした。その方法とは、教会を美しいバルコニーで囲んで、イエスが屋外で語られたことを示し、また、3種類の材料を用いました。イエスがこの場所に立たれたから、この地域の石である玄武岩。石灰岩のアーチはイエスがナザレ人だったので、実際にナザレからのもので、教会内部の壁の大理石は、イエスがローマ教会の頭であることを示すため、ローマからのものが用いられました。

大変興味深いことに、イエスがローマ教会の頭であるということなので、バチカンの、山上の垂訓に関するローマ教皇の教えを見てみましょう。

2000年の12月のことでしたが、私はロサンゼルスにおいて、ロサンジェルス・タイムズを読んでいました。そして、「ローマ教皇 救いについて包括的な見解」という見出しの小さな記

事に出くわしました。その記事には、ヨハネ・パウロ二世が、山上の垂訓の精神に従って正しい生き方をしている人たちは、たとえキリストを知らなくても、また教会に属してなくても、皆、神の御国に入ることができる、と発言したことが書かれていました。そこで、これから聖書のみことばに照らし合わせて、私たちは本当にキリスト抜きで救われることができるのかを理解していきたいと思います。

イエスがここで語られたことは、本当にご自身とは関わりのないことだったのでしょうか。誰でも、それらのことを実行する人たちは、救われることができるか？それは私たちが聖書を調べて行くと、当然ははっきりしてきます。イエスは、口を開いて、群衆に教え始められます。その場のほとんどの人たちがユダヤ人で、モーセの律法に精通している人たちであることをふまえて、イエスは、弟子たちに教えながらも、何千人もの人たちにもその一言一言が聞こえていることを知っておられました。山上の垂訓の初めの部分は、弟子たちに向けられたものではありませんでしたが、イエスはそれがすべての人の耳に入るように意図されました。そしてこのように始められました。

「心の貧しい者は幸いです。天の御国はその人のものだからです。(マタイの福音書5:3)」

私はしばしば考えます。心が貧しいというのはどういう意味だろうか。興味深いのは、聖書には、神の御霊から離れては、私たちには何もすることができないと書かれていることです。ダビデ自身も、罪を犯したあとで、詩篇139章7節において、「私はあなたの御霊から離れて、どこへ行けましょう。私はあなたの御前を離れて、どこへのがれましょう」と言いました。私たちは神から逃げることはできません。神の霊はどこにでもおられます。私たちは、私たちのうちに御霊がなければ、自分が貧しい者であることを理解するようにならなければなりません。

ダビデが預言者ナタンによってバテ・シェバとの罪を暴かれたときに、詩篇51章で言ったのは、まさにこのことでした。ダビデは「あなたの聖霊を、私から取り去らないでください」と言いました。ダビデは神の御霊から離れると、自分が貧しくて、惨めなものであることを理解していました。ですから、「心の貧しい者は幸いです」ということの心の貧しい者とは、自分たちには神の御霊が必要だと、心の貧しさを自覚している人たちのことです。自分には神の御霊が必要であると理解することが、あなたがたを幸せにしてくれるものなのです。すると、あなたには天の御国が与えられます。人はどのようにして天の御国に入ることができるのでしょうか。イエスが「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません」とおっしゃったのなら、明らかに、イエスを通して神の御霊をいただくことによって、あなたは天の御国を受け継ぐことができるのです。心の貧しい人とは、自分たちには神の御霊がなく、御霊を必要としていることを理解する人たちのことです。

そして、次はこれです。

「悲しむ者は幸いです。その人は慰められるからです。(マタイの福音書5:4)」

なぜ悲しむ人が幸いなのでしょう。何がその人をそんなに幸いにするのでしょうか。私たちが覚えていなければいけないのは、イスラエルの子らは、いつの日か、イエスが戻って来て天に現れ、その足がオリーブ山に立つのを見ることになるということです。聖書には、彼らが「ひとり子を失って嘆くように、その者のために嘆き、初子を失って激しく泣くよう

に、その者のために激しく泣く（ゼカリヤ書12:10）」と書かれています。その嘆きは、家族の一員を失ったためのものではなく、何か個人的にあなたの身に起こったことのためのものでもありません。その嘆きは、自分の力で救いを得るために、あなたに自分でできることは何もないこと、あなたのうちには神に捧げることのできるものが何もないことを理解した時の嘆きです。そしてユダヤ人たちは、自分たちが突き刺した者を仰ぎ見て、嘆き、激しく泣いて、この方こそが私たちの贖い主、この方こそが私たちの救い主であると理解します。

ですから、自分たちが誤った人物に従ってきたこと、誤った伝統に従ってきたこと、生まれてからずっと誤った霊を宿してきたこと、自分たちにはイエスが必要であることを理解した時に、悲しむ者は幸いなのです。それが、彼らが慰められることのできる唯一の方法なのです。聖書には、私たちは神の御霊によって慰められなければならない、と書かれています。実際、コリント人への手紙第二1章3～5節には、こう書いてあります。

「私たちの主イエス・キリストの父なる神、慈愛の父、すべての慰めの神がほめたたえられますように。神は、どのような苦しみのときにも、私たちを慰めてくださいます。こうして、私たちも、自分自身が神から受ける慰めによって、どのような苦しみの中にいる人をも慰めることができるのです。それは、私たちにキリストの苦難があふれているように、慰めもまたキリストによってあふれているからです。（コリント人への手紙第二1:3-5）」

私たちが見つかることのできる慰めは、イエスにあります。私たちはイエスにあってのみ、慰めを受けることができ、私たちはまた、その同じ慰めを、慰めを必要としている人たちに与えることができるのです。ですから、私たちが悲しみや慰めについて語る場合、イエスが全くすべてであることを覚えていなければなりません。私たちが、誰かを慰めることができるとすれば、それはその人にイエス自身を与えることでしかできません。聖書には、私たちは自分自身が受ける慰めによって、他の人たちを慰めることができると書かれているからです。

だから、イザヤ書第40章には、「慰めよ。慰めよ。わたしの民を」とあるのかもしれませんが。イスラエルの民にはイエスが必要です。そして、彼らに慰めを与えることのできる人たちがいるとすれば、それは主を知っている人たちで、道であり、真理であり、いのちであるものを彼らに与えることのできる人たち、彼らの生活、彼らの国、彼らの世界における平安の源を与えることのできる人たちです。

では次に進みます。

「柔和な者は幸いです。その人は地を相続するからです。（マタイの福音書5:5）」

柔和な者は幸いです。柔和であるとはどういうことでしょうか。柔和であるとは、謙虚であることです。謙虚であるとは、自分が何者であるかが問題なのではなくて、「彼」がどういう方なのか問題であること、自分が何をしたかが問題なのではなくて、「彼」が何をしてくださったかが問題であることを理解することです。それが柔和であるということです。創造主でなく被造物としての自らの立場を正しくわきまえることです。

興味深いのは、ユダヤ人は安息日ごとに、詩篇92章を読むことです。この詩篇92章は、安息日のために書かれた唯一の詩篇で、彼らは次のみことばを読みます。

「主よ。あなたは、あなたのなさったことで、私を喜ばせてくださいましたから、私は、あなたの御手のわざを、喜び歌います。主よ。あなたのみわざはなんと大きいことでしょうか。あなたの御計らいは、いとも深いのです。（詩篇92:4-5）」

ですから、一旦、あなたが自分の役目、役割、立場を把握して、神に栄光を帰すれば、あなたは実際に本当に柔和になるのです。イエスはご自身のことを証しして、謙虚で柔和であると おっしゃいました。イエスは自慢してそうおっしゃったのではなく、私たちに、ご自分の例から学んでほしいと願われたのでした。だから、もしも私たちが自分のことを大物である思ったり、何か私たちの成すことが重要だと思ったり、私たち自身が重要だと思ったりしているならば、私たちは山上の垂訓を正しく理解していないと思います。そして聖書には、エペソ人への手紙2章8～9節に、次のように書かれています。

「あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。それは、自分自身から出たことではなく、神からの賜物です。行ないによるものではありません。だれも誇るためのないためです。(エペソ人への手紙2：8-9)」

イエスが、柔和な者は幸いであるとおっしゃった際に意図されたのは、主の前に本当にへり下る人たちだけが、高く上げられ、そして地を相続することになるということでした。彼らは、真に、神が人類に与えてくださるものの所有者となるのです。

「柔和な者は幸いです。その人は地を相続するからです。(マタイの福音書5：5)」

それからイエスは続けて言われました。

「義に飢え渴いている者は幸いです。(マタイの福音書5：6)」

詩篇63章にはこう書いてあります。

「神よ。あなたは私の神。私はあなたを切に求めます。水のない、砂漠の衰え果てた地で、私のたましいは、あなたに渴き、私の身も、あなたを慕って気を失うばかりです。(詩篇63：1)」

たとえ水がなくても、飢えや渴きは神に対してのもので、現実の通常の水のためではありません。では、私たちはどうすれば、本当に義に飢え渴くことができるのでしょうか。イエスを通して神の御霊が私たちの生き方を変え、私たちの思いが変えられる時、すべてが変わるのです。もはや、私たちは肉的なことを欲しません。もはや、肉によって歩んではいけません。御霊によって歩み始めると、私たちは義に飢え渴く者となります。世にも、世にあるものにも飢え渴くことはありません。ですから、「義に飢え渴いている者は幸いです」というのは、私たちの思いが完全に変えられたときのみ、真理となり、実際のものとなるのです。そしてそれは当然、イエスによってしかできないことです。

そして聖書にはこうあります。

「あわれみ深い者は幸いです。その人はあわれみを受けるからです。(マタイの福音書5：7)」

興味深いのは、イエスご自身が私たちにあわれみを与えてくださったことです。私たちはあわれみにさらされました。そうして初めて、私たちはあわれみ深くなることができます。

普通の人にはあわれみ深くありません。人間の振る舞い、そして現在世の中で起こっていることを見ると、神から与えられるあわれみだけが人を本当に変え、人を自らあわれみ深い者にすることが分かります。ヘブル人への手紙4章16節にはこう書かれています。

「ですから、私たちは、あわれみを受け、また恵みをいただいて、おりにかなった助けを受けるために、大胆に恵みの御座に近づこうではありませんか。(ヘブル人への手紙4:16)」

私たちはどこにあわれみを見つけることができるのでしょうか。それは恵みの御座においてです。私たちは、どうすれば恵みの御座に近づけるのでしょうか。それは他ならぬイエスを通してです。そうやってあわれみを見つけるのです。

「私たちのためには、もろもろの天を通られた偉大な大祭司である神の子イエスがおられるのですから、私たちの信仰の告白を堅く保とうではありませんか。私たちの大祭司は、私たちの弱さに同情できない方ではありません。罪は犯されませんでした。すべての点で、私たちと同じように、試みに会われたのです。ですから、私たちは、あわれみを受け、また恵みをいただいて、おりにかなった助けを受けるために、大胆に恵みの御座に近づこうではありませんか。(ヘブル人への手紙4:14-16)」

大胆に至聖所にまで到達されたイエスを通して、私たちはその恵みの御座に近づくことができ、あわれみを見つけることができるのです。では、私たちはどうすればあわれみ深くなれるのでしょうか。私たちが恵みの御座に近づいて、あわれみをいただくことによって、なのです。

「心のきよい者は幸いです。その人は神を見るからです。(マタイの福音書5:8)」

すごいですね。「心のきよい者は幸いです。」エレミヤ書17章9節で、聖書にはこう書かれています。

「人の心は何よりも陰険で、それは直らない。だれが、それを知ることができよう。(エレミヤ書17:9)」

つまり、エデンの園で最初の罪が犯された時に、罪が世に入ってきて、その結果、人間の心は欺瞞的であり、何よりも陰険です。では、私たちはどうすれば心のきよい者になれるのでしょうか。

ダビデ王さえも預言者ナタンに罪を暴かれると、詩篇51章10節で「神よ。私にきよい心を造ってくださいと言いました。彼は自分の心がきれいではないこと、きよくないことを把握していました。

人生の問題は、心から出て来るのです。すべてのものが湧き出してくるのは、心からです。すべての始まりは、心にあります。ですから、聖書に、イエスは「心のきよい者は幸いです」とおっしゃったと書かれてあるなら、神以外の誰に、私たちにきよい心を与えることができるでしょう。イエスによらなければ、私たちはどうやって神に近づくことができるのでしょうか。

そこで、「心のきよい者は幸いです」というのは、私たちが主を知っていなければ、真に果たすことのできないものです。私たちのうちに聖霊がいてくださり、私たちの石の心が肉の心に変えられ、聖霊によって与えられたものが、私たちの心をきよい心に変えてくださってなければ、できないのです。心のきよい、幸いな人たちは、イエス・キリストの流された血潮によって救われ、聖霊を受け、新しい心と新しい魂と新しい霊を持つ人たちだけなのです。

「見よ。わたしは、すべてを新しくする。(ヨハネの黙示録21:5)」
私たちはキリスト・イエスにあって、新しく造られた者なのです。

それから、イエスは続けてこうおっしゃいました。

「平和をつくる者は幸いです。その人は神の子どもと呼ばれるからです。(マタイの福音書5:9)」

例えば、私たちが Unnecessary(不要) とか United Nothing (無意味な連合) などと呼んでいる国連 (ユナイテッド・ネーションズ) のような、平和のイニシアティブのための団体に勤める人たちですが、彼らは平和のために一生懸命に働いているのかもしれませんが、最終的には、平和の唯一の源は、平和の君でしかありません。

「平和をつくる者は幸いです。」この平和は、ごく限られた場所における、一時的な期間の、一時的な和平協定のことではありません。それは、私たちに、いつの時も、どんな場所でも平安をくださる平和の父のことなのです。そして私たちはイエスを通してのみ、そうすることができるのです。

聖書には、イエスが平和の君であると書かれています。聖書には、イエスが人のすべての考えに勝る平安を与えてくださると書かれています。そして聖書には、世が与えることのできない平安を、イエスは私たちに与えてくださると書かれています。世はそれを理解することもできないのです。ですから、「平和をつくる者は幸いです。その人は神の子どもと呼ばれるからです」というとき、私たちがイエスを通して神の息子や娘という地位を得るのでなければ、私たちはどうして神の子と呼ばれることができるのでしょうか。私たちが、私たちはイエスによって人のすべての考えにまさる平安を体験しているのであり、イエスによって、つまりイエスへの信仰によって、もはや他人ではなく、息子や娘となったのであり、私たちは神を「アバ、父よ」と呼ぶことができるのだという、イエスのみことばを本当に理解しなければ、私たちは決して自分たちのことを「平和をつくる者」とか「神の子」と呼ぶことはできません。

山上の垂訓の最後です。

「義のために迫害されている者は幸いです。天の御国はその人のものだからです。(マタイの福音書5:10)」

これは、政治的、あるいは地理的境界線に基づいた迫害ではありません。また、特定の場所における歴史的慣例に基づく迫害でもありません。これは、義のための迫害です。つまり、あなたが義の言葉を語る時に受ける迫害です。そして、何が、あるいは誰が、私たちの義となりえるでしょう。アドナイ・ツィドゥケヌ (「主は私たちの正義」)。主が私たちの義なのです。聖書には、罪を知らない方が罪とされたとあります。私たちがキリスト・イエスにあって、神の義となるためです。ですから、キリストによって、私たちは義となり、キリストによって、私たちは義を語り、キリストによって、キリストのために、私たちは義を掲げているのであり、そのために、世は私たちを迫害するのです。そして、私たちがそのことで迫害されるのなら、それは素晴らしいことなのです。それは、私たちが正しいことをしていることになるからです。

私たちは、イエスを信じれば素敵なことがあるとは、約束されていません。イエスはヨハネの福音書16章33節で、「あなたがたは、世にあっては患難があります」とおっしゃいました。

私たちは驚きはしません。私たちには、バラ色の人生は約束されていません。しかし、私たちには、それよりももっと素晴らしいものが約束されています。

イエスはおっしゃっています。

「あなたがたは、世にあっては患難があります。しかし、勇敢でありなさい。わたしはすでに世に勝ったのです。(ヨハネの福音書16:33)」